慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	神の実在と被造物の実在
Sub Title	The existence of God and the existence of creatures in Leibniz
Author	田子山, 和歌子(Tagoyama, Wakako)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.120 (2008. 3) ,p.35- 50
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, I aim to clarify the concept of possibility for an existence, or more precisely, for the exigence of existence (exigentia existentiae), Leibniz attributed to a contingent being (ens contingens). When Leibniz defines a contingent being, he always says `the essence (essentia) of contingent being does not contain its existence (existentia)'. But if the essence of a contingent being does not contain its existence, how can it be possible for the contingent being to have an existence? To solve this difficulty, it seems to be necessary first to examine the concept of existence for an necessary being (Ens necessarium), that is God; for Leibniz always cites the definition of God when he explains the existence of contingent being; according to him, the existence of God 'is contained in His essence', at variance with the existence of contingent being. This is a traditional argument for the existence of God. Leibniz thinks this argument would be sufficient, if the essence of God, which contains its existence, is conceptually possible; from this point of view, he says it is God's privilege to exist, if only His essence is conceptually possible. According to Leibniz, God will exist if only His essence is conceptually possible, because His essence contains the existence. It is impossible for God not to exist, for His essence does not contain 'non-existence'. In the case of a contingent being, however, is it not contingent for it to exist, even if its essence is conceptually possible. The reason for this seems to be obvious. The essence of a contingent being does contain neither existence nor non-existence. It must be possible for an contingent being both to exist and not to exist. It is noteworthy that, for Leibniz, we cannot clearly understand the notion of possibility for a contingent being, until we conceive the notion of of God, which excludes the possibility of non-existence. That is why Leibniz always cites the relation between God and creatures when he explains the existence of a contingent being.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000120-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

神の実在と被造物の実在

田子山和歌子*

The Existence of God and the Existence of Creatures in Leibniz

Wakako Tagoyama

In this paper, I aim to clarify the concept of possibility for an existence, or more precisely, for the exigence of existence (*exigentia existentiae*), Leibniz attributed to a contingent being (*ens contingens*).

When Leibniz defines a contingent being, he always says 'the essence (*essentia*) of contingent being does not contain its existence (*existentia*)'. But if the essence of a contingent being does not contain its existence, how can it be possible for the contingent being to have an existence?

To solve this difficulty, it seems to be necessary first to examine the concept of existence for an necessary being (*Ens necessarium*), that is God; for Leibniz always cites the definition of God when he explains the existence of contingent being; according to him, the existence of God 'is contained in His essence', at variance with the existence of contingent being. This is a traditional argument for the existence of God. Leibniz thinks this argument would be sufficient, if the essence of God, which contains its existence, is conceptually possible; from this point of view, he says it is God's privilege to exist, if only His essence is conceptually possible.

* 慶応義塾大学文学部非常勤講師（哲学）

According to Leibniz, God will exist if only His essence is conceptually possible, because His essence contains the existence. It is impossible for God not to exist, for His essence does not contain 'non-existence'. In the case of a contingent being, however, is it not contingent for it to exist, even if its essence is conceptually possible. The reason for this seems to be obvious. The essence of a contingent being does contain neither existence nor non-existence.

It must be possible for an contingent being both to exist and not to exist. It is noteworthy that, for Leibniz, we cannot clearly understand the notion of possibility for a contingent being, until we conceive the notion of of God, which excludes the possibility of non-existence. That is why Leibniz always cites the relation between God and creatures when he explains the existence of a contingent being.

はじめに

神 Deus の実在 existentia と，被造物 creaturae の実在は，いかなる関係にあるのか．以下でわれわれは，この問題をライプニッツに則して考えたい．

ライプニッツによれば，神の実在は，必然的 necessarium であるのに対し，被造物の実在は，偶然的 contingens である．偶然的とは，非必然的 non necessarium と同義であるから，この限りで，偶然的と必然的は反対関係にある．では，偶然的な実在，ないしは，必然的な実在とは，それぞれ，どのようなことを意味しているのか．

1. 必然的な実在と偶然的な実在の規定

ライプニッツにおいて，必然的な実在と偶然的な実在は，それぞれ，次のように定義されている．

神の場合，実在は本質と別ではない．あるいは，同じことである

が，実在することは，神にとって本質的なことである．だから，神は，必然的存在者 Ens necessarium である．

被造物は，偶然的なもの contingentes である．すなわち，実在が，その本質から帰結しない non sequitur ex ipsarum Essentia[1].

ライプニッツによれば，神にとって実在は「本質と別ではない」，あるいは，「神にとって実在することは本質的なことである」．このように，実在が本質と別ではないこと，あるいは，実在が本質的であることを根拠に，神は「必然的存在者 Ens necessarium」だと言われる．実在が本質的な「必然的存在者」にとって，実在することは必然的なのである．

これに対し，被造物は「本質から実在が帰結しない」．「本質から実在が帰結しない」とは，「実在が本質と別である」，ないしは，「実在が本質的なことではない」ということである．このように，実在が本質的でない，被造物にとって，実在することは，偶然的である．

「実在が本質と別ではない」神にとって，実在は必然的であり，他方，本質と実在が区別される被造物にとって，実在は偶然的である．神の実在と被造物の実在についての，このような区別が，トマスにさかのぼる伝統的な区別であることは明らかだろう．ライプニッツは，神の実在と被造物の実在に関する，このような伝統的な区分の基準を受け継ぎつつ，それを，必然的な実在と偶然的な実在の区別に用いていると言えるだろう．

実在が本質的な神は，「実在する」ことが必然的である．では，実在が本質的でない被造物は，「実在しない」ことが必然的なのか．実在しないことが必然的である，とは，実在できない，と同義である．ライプニッツ

[1] *De contingentia* [1689?]（アカデミー版ライプニッツ全集（以下 A），6-4-B, N. 325, p. 1649, ll. 17–19）: 'In Deo existentia non differt ab Essentia, vel quod idem est Deo essentiale est existere. Unde Deus est Ens necessarium. / Creaturae sunt contingentes, hoc est existentia non sequitur ex ipsarum Essentia.'

は，実在が本質的でない存在者，すなわち，偶然的存在者は，「実在できない」と，無条件には主張していないと思われる．しかし，一般に，事物の「本質」とは，その事物に帰される述語の根拠である．したがって，本質から帰結することのない述語が，その事物に帰属することは，不合理であるように思われる．このように考えると，偶然的存在者の場合，本質から帰結しない，「実在する」ことが，当の偶然的存在者に述語として帰属できるのはなぜか．この点が疑問に思われるのである．

偶然的存在者の本質から帰結しない，「実在しない」ことが，偶然的存在者に述語として帰属できるのはなぜか．このことを見るためにまず，われわれは，必然的存在者である，神の実在概念に目を向けてみたい．というのも，ライプニッツにおいて，偶然的存在者は，必然的存在者との対比で，理解されていた．したがって，偶然的存在者の本質と実在の関係も，やはり，必然的存在者との対比から，理解可能だと考えられるのである．

2. 神の実在論証——必然的存在者の実在——

神にとって「実在が本質的である」というライプニッツの神理解は，有名な神の実在論証 Argumentum pro existentia Dei に言及した箇所でも用いられている．ライプニッツによれば，神の概念から神の実在を論証する，アプリオリな神の実在論証は，アンセルムスが初めて定式化したものであり，トマスをはじめとするスコラ神学において繰り返しその有効性が批判的に検証されてきたものである．そして，デカルトは，そうした歴史的経緯を学んだ上で，再び完全性による神の実在論証を再構成している．

ライプニッツ自身も，上記の複雑な歴史的経緯を踏まえた上で，アンセルムスとデカルトによる神の実在論証を，一括して次のように要約し，評価している．

> その推論［神の実在論証］は，確かに見事な点を含んでいるが，

しかし，不完全である．

その要点は次のとおりである．

［大前提］何であれ，事物の概念notioから論証されるdemonstrariことが可能なものは，事物に述語付けられるattribuiことが可能である．

［小前提］ところで，最完全な存在者Ens Perfectissimumないしは最大のmaximum存在者の概念から，実在existentiaが論証されることは可能である．

［結論］したがって，最完全な存在者（神）に，実在が述語付けられることは可能である．すなわち，神は実在する[2]．

上記の神の実在論証は，小前提が正しければ，大前提によって，結論が導かれる，という構成になっている．

さて，上記の小前提「最完全ないし最大の存在者の概念から実在は論証されることが可能である」の，「最完全な存在者」あるいは「最大の存在者」は，ライプニッツが補足しているように「神」を指す．「最完全な存在者」あるいは「最大の存在者」とは，神の定義なのである．こうした神の定義である「最完全な存在者」から神の実在が論証可能だとするのが，上記の小前提である．したがって，小前提が正しければ，神の実在は論証される．このように小前提は，神の実在論証全体の要諦となっている．ただし，小前提すなわち「最完全ないし最大の存在者の概念から実在は論証されることが可能である」は，まだ論証されておらず，仮定にとどまって

[2] *Animadversiones in partem generalem Principiorum Cartesianorum* [1677–1702]（ゲルハルト版ライプニッツ哲学著作集（以下 'GP'）第4巻 pp. 358–359）: '. . . Continet aliquid pulchri haec ratiocination, sed est tamen imperfecta. Res huc redit. Quicquid ex notione rei demonstrari potest, id rei attribui potest. Jam ex notione Entis perfectissimi seu maximi demonstrari potest existentia. Ergo Enti perfectissimo (Deo) attribui Existentia potest, seu Deus existit'.

いる．したがって，ライプニッツは，先に引用した箇所に続けて，ただちに，小前提の証明に取り掛かる．

> 小前提 assumtio は，次のように証明される．すなわち，最完全ないしは最大の存在者は，あらゆる完全性を含んでいる．したがって，実在も含んでいる．実在は完全性のひとつだからである．なぜなら，実在しないより実在するほうが，‘より’ある plus，あるいは，より大きくある majus からである．
>
> 以上が［神の実在］論証である[3]．

小前提の論証の検討に入る前に，ここで用いられている「存在者 Ens」の概念について触れておきたい．「最完全ないしは最大の存在者」から「実在」が論証可能かを論ずる文脈においては，「存在者 Ens」の概念は，「実在するもの Existens」の概念とは，明らかに区別されている．だからこそ「存在者」が「実在する」かどうかは，論証を要することなのである．

さて，そうだとすると，神のような「最完全な存在者」ないしは「最大の存在者」が実在することは，どうしたら示されるのか．ライプニッツは，神のような「最完全ないしは最大の存在者は，あらゆる完全性を含んでいる」と言っている．すなわち，完全性を「すべて」含んでいることが，最完全ないし最大であることなのである．そして，こうした「全ての完全性を含む」存在者は，「実在も含んでいる」．では，なぜ，最完全な存在者は，実在も含んでいるのか．それは，実在が，完全性のひとつだからである．したがって，最完全な存在者は実在を含んでいなければならない．そして最完全な存在者が実在を含んでいることが，結局，「最完全な

[3] *Ibid.*: ‘Probatur assumtio: Ens perfectissimum seu maximum continet omnes perfectiones, ergo et existentiam, quae utique est ex numero perfectionum, cum plus majusve sit existere quam non existere. Hactenus argumentum’.

いしは最大の存在者の概念から実在が論証されることが可能である」の根拠になるのである.

さて，ライプニッツがデカルトやアンセルムスに帰している完全性による神の実在論証を一通り見てきたわけであるが，そこで見た，神の実在の特徴とは，実在は，最完全な存在者の持つ完全性のひとつに含まれている，ということである．ライプニッツは以上の完全性による神の実在論証について次のような評価を下している.

> 「完全である」ことや「大きい」ということを省略するなら，より適当でより厳密な論を形成できたであろう．すなわち，
>
> ［大前提］必然的な存在者は実在する（あるいは，実在が本質に含まれる存在者，ないしは，それ自身による存在者は実在する）．これは名辞［主語と述語］から明らかである.
>
> ［小前提］ところが，神は（神の定義により）こうした［必然的な］存在者である.
>
> ［結論］したがって，神は実在する[4].

上記の論証において，ライプニッツは，実在は神の完全性のひとつである，という考え方を，実在は神の本質に含まれる，という考え方に置き換えている．この置き換えによって，神の実在論証はより厳密なものになる，と彼は主張している.

ところが，ライプニッツは，上記のような神の実在論証を「不完全である」と言っていた．それはなぜなのか．彼は上の引用に続けて次のように言う.

---

[4] *Ibid.*: 'Sed omissa perfectione aut magnitudine potuisset formari argumentatio adhuc proprior strictiorque hoc modo: Ens necessarium existit (seu Ens de cujus Essentia est Existentia, sive Ens a se existit), ut ex terminis patet. Jam Deus est Ens tale (ex Dei definitione), Ergo Deus existit'.

この論が成立するためには，しかし，最完全な存在者ないしは必然的な存在者が，可能 possibile であり，あるいは，矛盾を含まない non implicare contradictionem こと，あるいは，同じことであるが，そこから実在が帰結する本質 essentia が，可能であることが明らかにされねばならない．しかし，こうした可能性が論証されない限りは，神の実在も，上記の論証において，完全な仕方で論証されたのではない，と考えるべきである．そして，一般に，（すでに言及したように）定義が，何か可能なものを表していることが明らかでない限り，その定義から，定義されたものについて，安全な仕方で，何かを導き出すことは，決してできないと，知らなければならない．というのも，もし，隠れた矛盾を含んでいたとしたら，不合理な帰結がそこから導かれる，ということもあるからだ．さしあたり，われわれは，この論証から，「可能でありさえすれば，実在する si modo sit possibilis, eo ipso existat」という，神の本性の輝かしい特権 privilegium を学ぶ．このこと［可能であること］は，それ以外の事物の場合には，実在を証明するには，不十分なのである[5]．

[5] *Ibid.*: 'Haec argumenta procedunt, si modo concedatur Ens perfectissimum seu Ens necessarium esse possibile, nec implicare contradictionem, vel quod idem est, possibilem esse essentiam ex qua sequatur existentia. Sed quamdiu possibilitas ista non est demonstrata, utique nec Dei existentiam tali argumento perfecte demonstratam esse putandum est. Et in genere sciendum est (quemadmodum olim admonui) ex definitione aliqua nihil posse tuto inferri de definito, quamdiu non constat definitionem exprimere aliquid possibile. Nam si contradictionem occultam forte implicet, fieri poterit ut aliquid absurdum inde deducatur. Interim ex hac argumentatione praeclarum hoc discimus divinae naturae privilegium, ut si modo sit possibilis, eo ipso existat, quod in caeteris rebus ad existentiam probandam non sufficit.'

「最完全な存在者ないしは必然的な存在者は，可能 possibile であり，あるいは，矛盾を含まない non implicere contradictionem」ならば，神の実在論証は成立するとライプニッツは言っている.「最完全な存在者」あるいは「必然的な存在者」という神の概念は，ライプニッツによれば，神の実在論証においては，不合理を含まぬもの，可能なものとして，仮定されているにすぎなかった．したがって，神の実在論証が完全なものになるためには，仮定にすぎない神の概念の可能性が論証されねばならないことになる.

上記の論点を理解するために，ここで，ライプニッツにおける「可能性 possibilitas」の概念について確認しておきたい．彼にとって「可能である」とは，単なる現実性と対比されるだけではない．彼の言う「可能である」とは，彼が説明しているように,「矛盾を含まない non implicare contradictionem」ことである．A と非 A のように，反対の関係にあるものが，同一主語に，同時に，述語として帰属するとき，ライプニッツは，その主語は「矛盾を含む」と言う．これに対し，A と非 A が，同時に帰属しないならば，その主語は，矛盾を含んでいない．このように矛盾を含まないことを，ライプニッツは「可能である」と呼ぶ可能性の概念は，矛盾の概念によって説明されているのである.

彼は，上記の神の実在論証においても,「最完全な存在者」ないしは「必然的な存在者」の概念が，矛盾を含まぬ，可能なものであるかどうか，更なる証明が必要だとしている．ライプニッツによれば,「最完全な存在者」ないしは「必然的な存在者」である神の概念は,「実在する」ことだけでなく，他にも複数の構成要素から，本質が構成されていると考えることができる．問題は，さまざまな構成要素から構成される神の本質は，A と非 A という，矛盾を生み出すような，反対関係にあるものを含んでいないかどうか，ということにある.

既に見たように,「実在する」ことをはじめとする，神の本質の構成要

素は，どれも，神の完全性である．こうした神の完全性は，いずれも，単独で見る限りは，概念的に矛盾を含むものではなく，可能なものである．では，本質の構成要素である完全性の一つ一つが，それ自体として矛盾を含まず，可能であれば，構成される本質全体も，矛盾を含まぬ，可能なものになるのだろうか．ライプニッツは，一般に，本質の構成要素がそれぞれ可能であっても，本質の構成要素全体は，不可能になる場合がある，と考える．その例に彼が挙げるのは，「最大速度」の概念である．彼によれば，「最大である」ことも，あるいは，「速度」も，それぞれ，それ自体としては，概念的に矛盾を含むことのない，可能なものである．しかし「最大である」ことと「速度」から構成された合成概念「最大速度」は，矛盾を含むゆえに，不可能なものになる[6]．「速度」は，限度を持たないもの，すなわち，最大であることがないものである．これは，速度の概念を，ライプニッツが数量 multitudo 概念の一つだと考えているからに他ならない．ライプニッツは，数量の場合，いかなる数が示されてもそれより大きな数があると考える．こうした特性をもつ数量は，どこまでも際限なく大きな値をとることができる以上，絶対的な意味では最大値をもつことはあり得ない．だから，速度は，「最大であることがない」ものなのである．このように，「最大であることがないもの」と「最大であるもの」という，A と非 A の関係にあるものが，合成されれば，当然，そのような合成概念は矛盾を含み，不合理なものとなってしまう．ライプニッツは，神の本質を構成する，構成要素全体も，矛盾を含む要素から構成されていないか

[6] GP. I, p. 239, *Eckhard an Leibniz* VI, Anhang 36: 'Non sequitur, omnes partes intelligo, ergo et totum, seu earum unionem, ut cum dico: velocitas maxima; clare distincteque intelligo, quid sit velocitas; item, quid sit maximum; non tamen intelligo perfecte ex hoc solo, an velocitas maxima sit possibilis, an non' このように，単独では可能なものでも，可能なものの組み合わせが可能かどうか，は，さらに証明されねばならない，ということが，ライプニッツが「両立可能」compatibile ないしは「共可能」compossibile という用語を使わざるを得なかったことの根拠である．

どうか，さらに論証が必要だと考える．なぜなら，場合によっては，ライプニッツが言っていたように，「隠れた矛盾を含んでいたとしたら，不合理な帰結が導かれる」こともあろうからである．

神の本質に含まれる実在は，可能なものである．そして，通常であれば，神の実在が可能であることから，直ちに，神の実在が結論されるはずである．しかし，神の本質の構成要素全体に隠れた矛盾が含まれていたら，神の本質には，矛盾が含まれることになる．そして神の本質に矛盾が含まれていたら，神の実在の可能性から実在を論証する，神の実在論証は，妥当性を失うことになる．こうした事態を回避するために，神の本質を構成する，構成要素の全体が，互いに矛盾を含まないかどうか，は，更に論証を要するというのが，ライプニッツの論点である[7]．

ライプニッツによれば，神の本質の構成要素全体が矛盾を含まぬ，可能なものであるかどうか，については，伝統的な神の実在論証においては，論じられることがなかった．ただし，神の本質が可能かどうか，さらに論証が必要だと主張したのは，ライプニッツ一人ではない．すでに，ライプニッツ以前にも，デカルトの神の実在論証に対し，同様の異論が出されていたことは，よく知られている[8]．ただ，ライプニッツの場合，神の本質が可能かどうかは論証をさらに必要とする，と指摘しただけではない．こ

[7] こうした「あらゆる完全性を持つ存在者」の概念が可能かどうか，上の引用の限りでは，ライプニッツは明言していない．だが，彼は，最完全な存在者の概念的可能性を否定しているわけではなく，むしろ逆であると思われる．事実，別の箇所では，全ての完全性が，相互に矛盾することなく，同一の主語である神に，同時に帰属する可能性について，論証を試みているからである（『最完全な存在者は実在する』*Ens Perfectissimum existat.* [1677?] (GP. IV, p. 358–359).）．また，神の実在論証批判においても，ライプニッツは，神の実在論証の不完全性を指摘しているが，論証の不合理性は主張していない．このことから，伝統的な神の実在論証の「不完全性」についての彼の指摘は，論証全体の不合理性を直ちに意味するものでないと思われる．

[8] *Secondes Objections Contre Les Precedentes Meditations* (*Oeuvres et Lettres de Des Cartes,* 1953, Gallimard, p. 364–365). なお Russell (1937), XV 107, p. 173 を参照．

のことは注目に値するだろう．というのも，彼は，神は「可能でありさえすれば実在する si modo sit possibilis, eo ipso existat」という点で「特権的」previlegius だとしていたからである．

既に見たように，神は実在可能である，ということから，神の実在が論証されるためには，神の本質の構成要素全体が矛盾を含まず可能であることが論証されねばならない．が，このことは，逆にいえば，神の本質の構成要素の全体が，可能でありさえすれば，神の実在は直ちに論証される，ということに他ならない．本質の構成要素全体が矛盾を含まず可能であれば，もはや，本質に実在を含む神が，実在することは，妨げられることはないからである．

このように「可能でありさえすれば実在する」ことを，ライプニッツは，神ならではの特権だと考える．なぜ「可能でありさえすれば実在する」ことは，神に「特権的」と言われるのか．それは，神以外の他の事物については，「可能でありさえすれば実在する」とは言えないためである．ライプニッツによれば「それ以外の事物の場合，可能であることは，実在を証明するには不十分である」．「それ以外の事物」が，被造物を指すことは明らかだと思われる[9]．むろん，被造物の場合も，その本質を構成する．構成要素が相互に矛盾しないのであれば，被造物は，「可能なもの」だと言うことができよう．それにもかかわらず，被造物は，神とは異なり，「可能であるだけでは実在を証明するには不十分である」．このようにライプニッツが考える理由は，被造物にとって「実在が本質的でない」と規定されていたことにある．実在が本質的でない，とは，本質を構成する構成要素に，実在が含まれていない，ということに他ならない．被造物は，たとえ本質が可能であっても，可能である本質の構成要素に，実在が含まれ

[9] たとえば，*De Libertate et Necessitate* [1680–1684] (A. 6-4-B, N. 271, p. 1445, l.15):「ただ神の実在を除き，すべての実在は，偶然的なものである Omnes existentiae excepta solius Dei existentia sunt contingenties」.

ていない以上，本質が可能であるだけでは，被造物の実在は帰結しないのである．

「実在を本質に含まない」被造物を，神のような必然的存在者と区別して，「偶然的存在者」とライプニッツが呼んでいたのは既に見たとおりである．ライプニッツにおいて，偶然的存在者は，本質に実在を含まない．したがって，本質の構成要素は矛盾を含まない，すなわち，可能であるだけでは，実在することにはならないのである．では，本質の構成要素が可能であるだけでは実在しない，偶然的存在者は，実在の可能性がまったくないのだろうか．ライプニッツはそうは考えていないと思われる．事実，彼は，偶然的存在者は，本質が「可能であるだけでは実在‘しない’」と主張しているだけであり，偶然的存在者は実在‘不可能’だ，とは言っていない．このことは，ライプニッツが，偶然的存在者について，「可能であるものはすべて，実在を要求する」と繰り返し主張していることからも明らかである[10]．可能であるものが「実在を要求する」とは，可能なものであれば直ちに実在するという意味ではなく，可能であれば実在の可能性をもつという意味なのである．しかし，偶然的存在者は，そもそも本質に実在を含まない以上，どうして，偶然的存在者が実在を要求する，あるいは，実在が可能だといえるのだろうか．一般に，事物の本質が含むものであれば，述語として事物に帰属できるのは，当然である．とすれば，本質が含んでいないものは，述語として事物に帰属できないのではないか．したがって，本質に実在を含んでいない偶然的存在者は，実在が不可能であることになりはしないか．このように考えるのは，ごく自然な発想であるように思われる．

---

[10] たとえば，*De Veritatibus Primis* [1680?] (A. 6-4-B, N. 270, p. 1442, ll. 15–16).: ‘...Omne possibile exigit existere.’ ライプニッツは，偶然的存在者は，実在を本質に含まないとしても，なお，実在できる，あるいは「実在を要求する」と考えているこうした「実在を要求する」という概念は，ライプニッツ以前の，中世においては見られないものだと思われる．

3. 偶然的存在者の実在の可能性

本質に含まれないものは，述語として事物に帰属できない，という考え方は，ライプニッツも，神のような必然的存在者については認めると思われる．神の場合も，神の本質に含まれないものは，無数にあると思われる．「実在しない」ことは，こうした神の本質に含まれぬもののひとつである．というのも，神の実在論証において，「実在しない」ことは，神の本質を構成する完全性ではない，と明言されていたからである．「実在しない」ことと反対関係にある，「実在する」ことが，神の本質に含まれている以上，「実在しない」ことは，述語として神に帰属できない．なぜなら「実在しない」ことと，「実在する」ことのように，同時に同一主語に帰属できないもの，すなわち，矛盾するものは，そのいずれかが，神に帰属できない述語として，排除されねばならないからである．今の場合，「実在しない」ことが，神に帰属できない述語であることは明らかである．

以上のように，神の場合，神の本質に含まれない「実在しない」ことは，神の本質に含まれる「実在する」ことと矛盾するために，述語として神に帰属出来ない．それでは，偶然的存在者の場合はどうだろうか．もちろん，偶然的存在者であっても，本質の構成要素に矛盾する，という理由によって，本質に含まれないのであれば，そのように本質に含まれないものは，述語として偶然的存在者に帰属できないだろう．では，偶然的存在者の本質に「実在する」ことが含まれないのは，「実在する」ことが，偶然的存在者の本質の構成要素と，矛盾するからなのか．ライプニッツはそうは考えていないと思われる．もし「実在する」ことが，偶然的存在者の本質の構成要素と矛盾する，とライプニッツが考えていたとしたら，「実在する」ことと反対関係にある「実在しない」ことは，偶然的存在者の本質の構成要素だということになろう．しかし，ライプニッツ自身は，偶然的存在者が「実在しない」ことは，偶然的存在者の本質の構成要素である

とは，まったく主張していない．彼にとって，偶然的存在者が「実在を本質に含まない」とは，偶然的存在者が「実在しない」ことを本質に含む，という意味ではないのである．

偶然的存在者は「実在する」ことを本質に含まないが，「実在しない」ことも本質に含まない．それゆえ，偶然的存在者が「実在する」ことは，偶然的存在者の本質の構成要素と矛盾しない．このようにライプニッツは考えている．偶然的存在者にとって「実在する」ことは，本質の構成要素と矛盾しない以上，「実在する」ことは，偶然的存在者に帰属可能なのである．

おわりに

以上から明らかなように，偶然的存在者の場合，実在は本質に含まれていないにもかかわらず，偶然的存在者は実在が可能である．それは，偶然的存在者の場合，「実在する」ことを本質に含んでいない，ということが，「実在しない」ことを本質に含んでいる，ということを含意しないからである．すなわち「実在する」ことと「実在しない」ことは，互いに矛盾することであるにもかかわらず，偶然的存在者の本質にとっては，二者択一的ではないのである．このことの持つ意味を最後に考えておこう．

「実在する」ことと「実在しない」ことは，無論，互いに矛盾する．したがって，偶然的存在者といえども，「実在する」ことと「実在しない」ことが，同時に同一のものに帰属することはできない．にもかかわらず，偶然的存在者は，「実在する」ことも可能であり，「実在しない」ことも可能である．

このような偶然的存在者の可能性と実在の関係は，神の場合との対比において，その特殊性が明らかになろう．本質に実在を含む神にとって，実在は可能である．そして本質が矛盾を含むことなく可能であれば，神は実在する．神の持つ本質の可能性は，実在することへの可能性である．この

ように可能性を何かへの可能性と考えることは，可能性の通常の理解だと思われる[11]．これに対し，偶然的存在者の場合，本質は，実在も非実在も含まない．このような偶然的存在者の本質の可能性は，実在することへの可能性でもあり，実在しないことへの可能性でもある．こうした両方向の可能性である，偶然的存在者の可能性は，何かへの可能性という，一方向しかもたない，神の可能性の理解と異なっていることは明らかである．興味深いのは，実在することも実在しないこともどちらも可能である，という，偶然的存在者の可能性の概念は，実在することの可能性でしかない神の可能性の概念を俟って初めて明らかにされるという点である．ライプニッツが偶然的存在者の実在と可能性の関係を論じる際，常に，神の実在と可能性の関係に言及したのはこのためであった．

[11] ライプニッツにおける神の様相理論は，伝統的な様相理論と大きな差異がある．ライプニッツにおいて，神のように必然的な実在は「可能ならば実在する」．つまり，必然的な実在は，実在そのものだけでなく，可能な実在とも同値関係にある．神の場合，必然性と可能性のこうした同値関係は，「実在」だけでなく，他の属性についても同様であるのだが，このことは，アリストテレス由来の伝統的な様相理論から見れば，大変興味深い．というのも，伝統的な様相理論においては，必然性と可能性は同値関係ではなく，含意関係にあるからである．つまり，伝統的な様相理論においては，A の必然性は A の可能性を含意する．そして，A の必然性が A の可能性を含意するのは，A の必然性は A を含意し，さらに A は A の可能性を含意するからである．こうした伝統な様相理論とライプニッツにおける神の様相理論の相違については，ベルリン工科大学 Hans Poser 教授から，本稿の論点に全面的に賛成いただいた上で，示唆をいただいた．Wakako Tagoyama, *L'existence de Dieu et l'existence des créatures chez Leibniz*（『慶應義塾大学大学院 21 世紀 COE プログラム　人文科学分野　心の解明に向けての統合的方法論構築　平成 17 年度成果報告書』*Corners of the Mind: Classical Traditions, East and West* 2007 年）参照．